元朝の学習カリキュラムをめぐって

――『程氏家塾読書分年日程』執筆考

松　野　敏　之

序

朱熹（1130～1200）が大成した学問は後に「朱子学」「理学」等と呼ばれ、宋元の世を通して中国全土へ普及していった。特に元朝の科挙では程朱及び朱子後学の経書注釈が主とされるようになり、朱子学を奉じる士が加速度的に増加した。朱子学者にとって「読書」とは、一般的には“書を読む”ことを意味するが、より重要な意味としては“四書五経など聖賢の書（経書）を読む”ことである。朱熹が学問の核として提示したのは、「居敬」と「窮理」に努めることによって、人格を養い、聖人の境地を目指すことであった[1]。「居敬（敬に居る）」とは心を覚醒・集中させて取り組むことであり、「窮理（理を窮む）」とは外在事物や内心などを確実に把握していくこと。この「窮理」の重要な方法が聖賢の書（経書）を読むことである。真の朱子学者にとっての読書（経書を読むこと）とは、単なる知識を得ることではない。人としていかに生きるか、いかに聖賢の境地に近づくかを、聖賢の遺した書（経書）を通して実感的に考察・把握することとなるのである。

元朝（1271～1368）には朱子学が普及し、科挙では朱熹の説が主とされた。この時期、朱子学者としていかに「読書」すれば良いかを考え、その読書方法を学習カリキュラムとして提示した書に、程端礼『程氏家塾読書分年日程』（以下、『分年日程』と簡称）がある。この書は中国最初の詳細な学習カリキュラム書として知られる。元朝において科挙が再開された時期に著され、『元史』巻190・程端礼伝には「国子監以て郡邑の校官に頒示し、学者の式と為す」と、当時の学校教育に採り入れられたことが記されている。後世では科挙対策の書として注目を集め、その影響は元朝のみならず、明清の世にも及んだ[2]。現在では、教育法や教育思想、科挙史、学校制度などの観点から採りあげられることが多く[3]、また『分年日程』には当時刊行されていた多くの書籍が学習者のための参考書として挙げられていることから、当時の出版文化という観点からも検討されている[4]。

多方面から取りあげられる『分年日程』ではあるが、専論の研究はさほど多くはない。いくつか提示されてきた中国の研究では、学習者の年齢に応じて教育に段階を設けたこと、道徳教育を教育の核に据えたこと、朱子の教学法（「朱子読書法」）に基づいて詳細な「課程」を構築したことが具体的に指摘されてきたが[5]、これらは『分年日程』がいかなる書であるかに主眼を置いた研究であり、作

者程端礼の問題意識や執筆の意図などについては深く考察せず、甚しくは程端礼の教育思想には全く独創性がないとまで評されることもある[6]。日本でほぼ唯一の専論となる鈴木弘一郎氏の論考[7]は、『分年日程』執筆の背景として「科挙の受験カリキュラムを作るためではない」こと、「程端礼は全ての読書人が正しい方法によって正統なる朱熹の教えを学ぶようにと願って」著したことを指摘している。この指摘自体には大いに賛意を表するものであり、氏の論考は丁寧に程端礼の事跡などを調べた上で考察を進めている点においても注目に値する。しかし、『分年日程』執筆の動機に関しては、程端礼自序に明言されていることを『畏斎集』などで裏付けたものであり、なぜ程端礼が学習カリキュラムを作成したのか、『分年日程』を著した程端礼の問題意識はいかなるものであったか、などについてはいまだ考察の余地がある。また、『分年日程』と科挙との関連について言えば、鈴木氏のように科挙のために書かれたのではないとの見解もあるが、科挙が制定されたことを契機に、科挙対策のために書かれたという見解[8]も多く見られる。後世では科挙対策の書として知られるだけに、『分年日程』と科挙の関係についても程端礼の意識より探る必要があろう。

本稿では、程端礼自身の問題意識を検討することに主眼を置く。程端礼はどのような意図によって『分年日程』を著し、そこには当時の教育にどのような問題があると認めていたのか。あるいは本当にただ「朱子読書法」に従ってカリキュラム化しただけであったのか。また『分年日程』は科挙のためのカリキュラム書とみなされてきたが、程端礼自身は科挙をどのように考え、それがいかに『分年日程』に反映されているのか。これらに関して検討を試みたい。扱う資料は、従来の研究でも用いられてきた『分年日程』と『畏斎集』であることに変わりはないが、ただ先行研究においては資料として挙げられてこなかった『分年日程』元刊本の頭注も重視する。『分年日程』のテキストには、主に常熟瞿氏鉄琴堂剣楼蔵「元刊本」と正誼堂全書所収「清刊本」がある[9]。元刊本には、清刊本にはない頭注が附され、傍証として朱子や程子、真徳秀等の見解を記している。この頭注は程端礼の自注であり、程端礼は時として自分のことも語っているのである。本稿では『分年日程』執筆に関する程端礼の意図として、この頭注も参考としていく。

一、程端礼と『分年日程』

程端礼、字は敬叔（けいしゅく）、号は畏斎（いさい）、浙江鄞（ぎん）県の人。科挙こそ受けなかったものの、40年以上にわたって教育に従事した儒学者である。著作としては『畏斎集』六巻、『程氏家塾読書分年日程』三巻が伝わる。

程端礼の主著となる『分年日程』には「延祐二年」の自序と「元統三年」の自跋が見える。延祐2年（1315）に最初の刊行を行ない、20年後の元統3年（1335）に再び改訂刊行したようである。程端礼が何歳くらいで執筆したかを明確にする

ために、程端礼の生卒年を確認しておきたい。

程端礼の生卒年は黄溍(こうしん)の墓誌銘[10]に「至正五年夏六月甲子」「享年七十有五」とあることから、咸淳7年（1271）生まれ、至正5年（1345）卒と推定されている。しかし、これと齟齬することとして『畏斎集』には、「至正十八年」など程端礼没後となる表記も見られる[11]。もし至正18年（1358）まで程端礼が活躍していたなら、生卒年には10年以上の差が生じてくるのであるが、結論を先に言えば黄溍の記述を正しいと考えてよいであろう。程端礼には泰定元年（1324）に進士に及第している弟がいる。その弟程端学の墓誌銘[12]には「元統二年」(1334)、「享年五十七」とあり、程端学の生年は至元15年（1278）となる。そして程端礼と弟とは7歳の年齢差があることが述べられており[13]、このことからしても程端礼の生年は咸淳7年（1271）となる。つまり、程端礼が『分年日程』を最初に刊行したのは延祐2年（1315）45歳、改訂刊行したのは元統3年（1335）65歳の時となる。

程端礼は生涯のほとんどを教育に従事し、広徳建平県学儒学教諭・池州建徳県学儒学教諭・信州稼軒書院山長・建康江東書院山長・鉛山州学儒学教授・慶元路儒学訓導・台州路儒学教授などを歴任した。元朝は諸路に学校を設置しただけでなく、書院にも官学と同様の待遇を与えた[14]。逆に言えば、私設であるはずの書院の多くが、元朝では朝廷の管理下に置かれたのである。程端礼が山長に任じられた稼軒書院・江東書院も朝廷の支持を得た書院であった。程端礼の在任時期は明確に分かるものではないが[15]、建平県学の儒学教諭に任じられて以来、ほぼ継続して教育に携わっている。『分年日程』巻2（頭注）には「端礼は不才なるも、教事を職(つかさど)る者(こと)四十年」と述べ、晩年73歳の時に著した文章にも「江左の学校に在ること四十余年」(『畏斎集』巻4「送馮彦思序」）と回顧している[16]。40年にわたって教育に従事してきた程端礼が、その結晶として元統3年（1335）65歳の時に改訂刊行したのが現在伝わる『分年日程』となるのである。

『分年日程』に記された学習カリキュラムを簡単にまとめると、次のようになる。8歳の入学時から基礎を養うため、4日を一周期とし、3日間は小学書や四書五経の本文を読み、1日は文字を習う。15歳以後は、本格的な学問に入り、志を立てて経書の暗誦・読解に入っていく。これら丁寧に組み立てられた課程の中で『分年日程』が強調するのは、学習者は一日にただ一冊の書だけを読み（一種類の学に取り組み)、その書を終えるまで次の書を読まないこと。経書を読むとはまず暗誦することであり、少しずつ区切って暗誦していき、記憶した内容をじっくりと玩味することによって理解を深め、さらには学習者の人格を養成していく。何よりもこの「暗誦―玩味」による熟成と、ただ一冊だけを何日もかけてじっくりと読むことにより、その経書に深く沈潜させることが『分年日程』の主眼である。ただし、玩味のためにはその経書に関する多くの先賢の書も参考とすることが求められ、『分年日程』には同時代に刊行された書も含めて多くの参考書が挙げられている。そして、この「暗誦―玩味」によって学習者の根本が養われたな

らば、あとは歴史書や先賢の優れた文章を読んでいく。歴史書は、書かれていることを過去のこととして見るのではなく、自分がもしその場にいたらどうするかを考えながら読むようにする。このように学問に取り組んだ後、文章の書き方をしっかりと学んだなら、科挙などにはいくらでも対応出来るようになっていようというのである[17]。

では、程端礼はいかなる意図のもとにこの『分年日程』を作成したのか。程端礼の問題意識や関心事について検討してみたい。

二、『分年日程』作成経緯

程端礼が『分年日程』を著した目的については、序文（延祐２年・1315）によく示されている。それによれば、読書してしっかりと道理を把握してもいないのに、慌てて文章を作ることを学び、結局根本がないので文章は体をなさず、書物に習熟することもなく、生涯を無駄に過ごしてしまう者が多い。人々は朱子の説を主とすることを知りながら、読書に方法があることを知らないのである。それ故に、「朱子読書法」に基づいて『分年日程』を作成し、これらの弊害を正そうとしたという。

「朱子読書法」に基づくことは、もともと史蒙卿（号は果斎、1247 ～ 1306）から教わったことであり、「余 早年自り学を甬東の果斎史先生に受け、朱子読書法六条を授けらる」（『畏斎集』巻４「送馮彦思序」）と述べている。程端礼自身、「朱子読書法」に基づいて経学を学んでいるのである。しかし、教育に従事するようになった程端礼は、最初から「朱子読書法」だけに基づいたわけではなかった。『分年日程』巻２（頭注）には次のように記している。

> 端礼は当初、西山（真徳秀）の「応挙工程」の法を用いて朋友に教えていた。それは一日のうちに、四書を読む、五経を読む、先賢の文章を読む、自分で文章を作る、史書を読むというもので、この五つのことに努力すること非常に慌ただしいものであった。ところが読んだ書物は、どれも精密に理解できず、また自分のなかで熟することもなく、一つもものにならず、作った文章も巧みとは言い難かった。結局、今の俗学と違いはなく、学ぶ者に生涯、己の為にし、自得していく内実を備わらせることもできなかったのである。いわゆる本末ともに失われたものであった。
>
> その後、ただ朱子の法だけを用いてこの「分年日程」を作り、しっかりと守って朋友と共に学んでいくと、非常に効果があった。およそ十五志学の時より努め始め、３年を待たずに四書本経と伝注をしっかりと読み終わり、併せて考索していった。これ以後の３年は史書を読み、作文を学び、編鈔を行った。合計するとただ６年。いわゆる本末ともに備わった状態となった。[18]

これは晩年に書いた自注であり、ここには真徳秀の「応挙工程」を実践したことが記されている。結局、「応挙工程」では効果があがらないことを実感し、「朱子読書法」を6年にわたって実践・教授したというのである。

「応挙工程」と「朱子読書法」との大きな違いは、カリキュラムの立て方にあると程端礼は見ている。「応挙工程」は、一日のうちに四書・五経・先賢の文章・史書を読むこと、文章を作ることを全て学ぶ。色んな書を少しずつ日々読み進めていく方法なのである。しかし、「朱子読書法」では一日のうちに読むべき書は一冊（一種類）のみ。あれもこれも一日のうちに読んでも効果はあがらないため、ただ一冊の書をじっくりと暗誦しながら理解していく。また注目すべきこととして、程端礼は実際に自ら取り組みながら「朱子読書法」を採用し、学生の教育に用いていることである。元統3年（1335）の跋文に「右、読書分年日程。余 此を守り、友朋と共に読み、歳々刪修す」（『分年日程』巻3）とあるのも虚言ではなかろう。

次に、なぜ程端礼がカリキュラムという形で教育法を提示したかという問題がある。これは『分年日程』『畏斎集』に断片的にではあるが程端礼が危惧していた問題をうかがうことができる。次に引く二つの文章は、ともに当時の科挙制度が朱熹の説に基づいていることの幸いを述べた後に続けて論じたものである。

> 惜しいことに、科挙の制度は整ったが、学校にはいまだ定法がなく、そのために教えること・学ぶことは、ただ教官が知っていること・得意なことに従うに過ぎず、依然としてかつての他人の文章を漁って剽窃するだけで、じっくりと取り組んで自得するという実効が無いという弊害からは免れていない。試験における経義もかつての悪習を固守するだけで、試験官も本来の試験の主旨を慮って末流の弊害を救うことができない。……願うことは、学校にはしっかりと士を育てる内実が備わり、科挙の制度を補い、道に志す士たちは、学校や書院を選ぶことなく、みなが常に学びたいと思うようなところとなることである。そのため私はいま（藍山書院の）改修工事の経緯を記し、古今の学校の長所・短所を述べることによって、「朱子読書法」を学ぶ者たちの勤めるべきこととして提示する。(19)

> いまは学校の教法が確立されていないために、教師の知っていること得意なことに従い、これを教えとなし、学問としているに過ぎないのである。(20)

ともに学校の問題として、学生は教えるべき立場の者（教官・教師）の力量や得手不得手に大きく左右されることを指摘する。特に前者の文章では、学生たちはどこの学校・書院で学ぶかにかかわらず、しっかりと「朱子読書法」に基づいて学ぶことにより、成熟することを願っている(21)。だからこそ「敢えて私（ひそ）かに此を著し、以て教養〔教育〕を職（つかさど）職る者の取るを待つ」（『分年日程』巻2）と

も述べて、この『分年日程』のカリキュラムを学校の教法に採用してくれることを願っているのであろう。

学校や教育の問題はいつの時代・どの地域にも見られることであろうが、程端礼の場合は学生が学校や教師によってあまりにも大きく左右されているという現状を問題視している。その解決策として、しっかりした教法（学習カリキュラム）を確立することにより、学生はどこの学校、どの教師について学ぼうとも、立派な士となれるよう望んだのであろう。程端礼には、「若(も)し能く此くの如く読書すれば、則ち是れ天下第一等の学を学び、天下第一等の文を作り、天下第一等の人と為らん」（『分年日程』巻２）と自身が作成したカリキュラムに対する自負も見える。また『分年日程』が経書解釈に際し、多くの参考書を挙げるのもこれ故ではないかと推測する。程端礼はこれが経書の正しい解釈であるとは提示しようとしなかった。それは朱熹の解釈が正しいと信じていたからかもしれない。しかしそれならば、『分年日程』においては朱熹の解釈した書や程端礼が正しいと考える書のみを参考書とすれば良いことであろう。ところが、古注や多くの先賢の書を挙げているのである。おそらく程端礼としては、固定的な解釈を提示することよりも、学生が正しい読書法に基づいた上で、多くの書を参考としながら自分なりに経書を玩味し、道理を実感的に把握するよう意図していたのではなかろうか。程端礼は正しい「教育法」を文章として示すという方法も採らず、また正しい解釈を経書の注釈という形で著すこともせず、ただ学校教育の場において学生が正しい読書法に基づいて学ぶことを願って『分年日程』のような学習カリキュラムを作成したと考え得るのである。

三、朱子読書法と『分年日程』

学習者として程端礼は「朱子読書法」に依拠して経学を学び、教育者としては試行錯誤しながら「朱子読書法」を用いて学習カリキュラムを作成した。そのような程端礼が企図したのは、ただ「朱子読書法」に従うことだけだったのであろうか。

程端礼の著述としては『分年日程』と『畏斎集』が伝わるのみであるが、これらには人性論や理気論、あるいは経書をいかに解釈していたかということに関するまとまった論述は見られない。程端礼自身の見解については、現存する文章の断片から類推するしかないのである。程端礼が明言しているわけではないが、『朱子読書法』と『分年日程』を比べると、僅かではあるが程端礼の見解が反映されている形跡があることも指摘しておきたい。

「朱子読書法」とは、輔広(ほこう)が朱熹の「読書法」に関わる見解を整理し、「居敬持志」「順序漸進」「熟読精思」「虚心涵泳」「切己体察」「著緊用力」の六条を綱領としてまとめたものである。これをさらに、張洪と斉熙が「読書法」に有益な朱熹の言説を増補した。現在伝わる『朱子読書法』四巻は、元の至順年間に刊行された

ものに基づく。程端礼が史蒙卿から教わり、若い頃に読んだ「朱子読書法」と現行本『朱子読書法』とでは異なるものであろうが、程端礼が現行本『朱子読書法』を閲覧していた可能性は高い[22]。その『朱子読書法』では、複数の書を混淆しながら読むことを戒め、じっくりと一冊に集中することや、読書（経書を読むこと）とは必ず暗誦できるようにし、その上で書の内容を玩味し理解していくことが強調されている。この基本方針は、『分年日程』のカリキュラムにしっかりと備わっているものである。

だが、『分年日程』が『朱子読書法』に見える朱熹の見解に全て基づいているかというと、当然ながら些末な差も現れてくる。たとえば、『分年日程』では15歳から本格的な大学課程の学習に入る際に「尚志」(志を尚ぶこと)を重視し、「十五志学の年自(よ)り、即ち当(まさ)に志を尚ぶべし。学を為すは道を以て志と為し、人と為りは聖を以て志と為す」(『分年日程』巻1）と述べるが、『朱子読書法』では意識を覚醒しながら読書に集中するという意味での「持志」あるいは「篤志」が見えるのみである。あるいは、『朱子読書法』では読書の際に、諸説紛紛として錯綜している場合には、思慮を静かに収めることや静坐によって心を穏やかにすることの有効性を説いている[23]。「静坐」は、朱熹が師である李侗等から継承したことでありながら、学ぶ者たちが寂静へと陥いる危うさを畏れ、修養法としては「静坐」を警戒し、最終的には「敬」へと主張を結実させていったという経緯がある。しかし、『朱子読書法』では読書の合間に心を静めることや静坐に取り組むことの有効性を説いた、肯定的な言を多く収めている。『分年日程』は灯火を用いる時期や休憩についてなど[24]、細々したことも述べているのであるが、「静」や「静坐」については積極的に言及しない[25]。

「尚志」を強調した背景には史蒙卿の教えがある。「尚志」（あるいは「立志」）が学問において重要なことは言うまでもないが、『分年日程』綱領によれば、「尚志」は程端礼の師である史蒙卿が重視したものであった。史蒙卿は学生に教える際、常に四つの綱領を座右に掲げ、その綱領の第一が「尚志」であったという[26]。程端礼はこの教えを受け、『分年日程』でも大学課程に入る時に、改めて「尚志」を喚起しているのである。また「静坐」などを採り入れなかったことは、程端礼に明確な発言があるわけではないが、程端礼を取り巻く学問環境に起因している可能性も高い。程端礼の出身地である慶元路は、陸子門人の代表格とみなされる楊簡等「甬上の四先生」が活躍した地である。『元史』程端礼伝にも慶元では陸子の学が盛んであったことが記され[27]、たとえば程端礼とほぼ時代を同じくする慶元四明の趙偕は、陸学を奉じ、「静虚」を学問の宗旨に掲げ、静坐を重視した[28]。「静」「静坐」は陸学の重要な主張の一つとみなされるものなのである[29]。このような状況下において、程端礼は陸学を警戒して「静」「静坐」などを敢えて積極的には言及しなかったとも推測し得るのである。

また、『分年日程』がカリキュラム化した史書の読書法や、先儒の文章を学ぶための読書法なども、『朱子読書法』には記されていない。これらは程端礼が朱

熹や先儒の見解を踏まえながら、自身の経験においてまとめたものである。

要するに、程端礼は「応挙工程」を試してみたりするなど、模索しながらカリキュラムを考えていたのであり、「朱子読書法」も選択的に用いながら、自身の見解や実践経験に基づいて『分年日程』を作成しているのである。

四、科挙と『分年日程』

『分年日程』はその性質上、科挙対策のためのカリキュラム書として知られている。元朝において科挙再開が決定してから2年、実際に進士が選出された延祐2年（1315）に『分年日程』は最初の刊行がなされた。『分年日程』が科挙のために著されたと見られるのも当然のことである[30]。『分年日程』が科挙と関連して注目されてきたという事実からも、むしろ問題とすべきは程端礼が科挙をどのように捉え、また科挙再開がどのように『分年日程』に影響を与えたかということになろう。

周知の通り、元朝で最初の科挙となる戊戌の選試（1238年）は、一度実施されただけで中断されてしまった[31]。次に科挙が再開されるのは皇慶2年（1313）の制定を待たねばならず、この翌年、各地で郷試が実施され、さらに延祐2年（1315）には元朝最初の進士が選出された。これら元朝における科挙制定のためには、世祖フビライに仕え、朱子学の普及に尽力した許衡（1209～1281）等の働きがあった。許衡は詩賦を廃し、経学を重視するという元朝科挙の基本的方針を制定[32]。程端礼も元朝の科挙制定の功を許衡に認め、次のように記している。

> 本朝（元朝）では、許文正公（許衡）が朱子学に基づいて世祖フビライ皇帝を大いに補佐し、初めて科挙の運気を開いてより百年、天下の学ぶ者たちは朱子が注釈した経書を尊んで、孔子・孟子にまで遡ることを知るようになり、その功績はとても大きい。科挙の制度は、朱子の「学校貢挙私議」を採用し、明経は程朱の説を主とし、……すべて宋末の悪弊を一掃するものであり、理学と科挙の学問を合致させた。道に志す士にとって都合がよいこと、どうして漢・唐・宋の科目がうかがうことできるものであろうか。あるいは士が今日に学べること、なんと幸いなことではないか。[33]

程端礼は、再開された科挙の制度が朱子の説に基づき、理学に取り組むことと科挙の準備をすることが一致していることを幸いと喜んでいるのである[34]。では、程端礼は科挙が再開されたことを受け、その科挙の受験対策のために『分年日程』を著したのであろうか。おそらく程端礼は科挙が制定される以前から既に『分年日程』作成に着手していたであろう。科挙再開を受けて『分年日程』に科挙対策用の課程を採り入れた形跡は見られるが、最初から科挙のためにカリキュラムを構築してはいない。

『分年日程』は延祐２年（1315）の序文から元統３年（1335）の跋文までの20年間に、朋友達と取り組みながら改訂してきた。具体的にどこをどう変えたのか、延祐二年本が現存しない今、明確には分からないが、現行本『分年日程』を精査するといくつかの改訂の跡が見受けられる。

巻１の経書を読む課程の解説では、師の立場に立った記述や「生徒に～をさせる」という表現が目立つ。これらはおそらく最初の頃に作成したものと推測し得る。一方、延祐二年本からの最も大きな改訂としては「作科挙文字之法」が挙げられる。これは真徳秀の「応挙工程」を参考として作成したもので、十日を一周期とし、九日間は過去の模範答案や科挙に役立つ先賢の文章・古賦・制誥・章表・策などを読み、一日は作文するという課程である。『分年日程』巻２の巻末に附された「空眼簿」（学習到達チェックシートのようなもの）では、この一連の科挙の文章を学ぶカリキュラムを「読作挙業日程」と名付けている。科挙の答案を読み、作成することを主眼に置いた課程であろう。しかし、『分年日程』巻１で「空眼簿」の使い方を解説しているところ[35]では、この「読作挙業日程」のことを「分日作文日程」と呼んでいる。これは最初は「分日作文日程」としていたものを「読作挙業日程」と改めたからであろう。ここに対応する課程解説としては、『分年日程』巻２に「学作文」「作科挙文字之法」がある。「学作文」の解説はやや長いものであるが、この解説の途中から後年に改訂がなされたように見受けられる。前半の方で「若(も)し未だ場屋（科挙の試験場）を忘れざれば」というおそらく科挙が実施されていなかった頃に書かれたであろう表現がある一方で、後半には「今の試中の経義」「今日の郷試の経義」などすでに科挙が実施されている時の文章が見られる。要するに、程端礼は当初、一般的な文章能力の向上をはかって「学作文」という課程だけを立てていたのであろうが、延祐元年に科挙が正式に制定されると、真徳秀の「応挙工程」を参考としながら科挙用の文章学習を導入したと考え得るのである。

このように改訂した背景には、『分年日程』が学校に採用されることを程端礼が企図していたということもあるかもしれない。程端礼は「敢えて私(ひそ)かに此を著し、以て教養を職(つかさど)る者の取るを待つ」（『分年日程』巻２）と述べていたことは既述の通りであるが、初期に書かれたであろう「空眼簿」解説に関わるところでは次のようにも述べている。

> 望むらくは、生徒が日々常に守って、心身ともにゆったりと落ち着いて、日を積み重ねて月に、月を積み重ねて年となっていくことであり、そうして師弟ともに力を尽くしていったならば、その効果はおのずと現れるだろう。この方法を学校や公的教育機関で実施したならば、官吏の監督や考査に最も便利であろう。[36]

程端礼は、朱熹の法に基づいた正しい「読書法」を広めることを望んでいた。

科挙が再開された今、学校の教法として用いるには、当然ながら科挙対策も含めなければならないであろう。そのために科挙用の文章作成を学ぶことを後から追加したと考え得るのである。しかし、程端礼が最初から科挙対策のために『分年日程』を作成していたとは考え難く、むしろ科挙の文章を学ぶ課程を後から改訂していること自体、当初の意図は科挙になかったことの証左ともなろう。科挙用の文章学習も『分年日程』においては最後の仕上げとなる課程であり、やはり経書の読解を通して人格を養成する「理学」（朱子学）を修めることを主としていたのである。それ故に、次のような発言がなされる。

> 延祐に改元されてから、科挙の制度が制定され実施されることとなった。私はそれまで教えていた経義を明らかにする法とおおむね同じであることを喜んだ。(37)

程端礼が喜んでいるのは、科挙が制定されたことではない。前節でも記した通り、程端礼は若い頃から「朱子読書法」に従って学問に取り組み、朋友たちとその実効性を確認しあいながら、カリキュラムを作成していたのである。そのような折に、朱熹の説に基づいた科挙の制度が制定された。程端礼はまさにこれまで自身で学び教育に用いてきた内容が、科挙の制度と一致したことを喜んでいるのである。『分年日程』自序でいう「誠に千載学者の大幸」という表現も、君子となるべく努める学問（理学）と科挙に合格するための努力（挙業）とが合致していることを喜んだものである(38)。またそうであればこそ、「もしこの読書法に依拠して何度も読むことが出来たなら、誰が大儒となることを妨げようか」(39) と述べて、自身のカリキュラムが大儒を育てるものであることを自負するのである。さらに『分年日程』の頭注には次のような話題も見える。

> 端礼（わたし）はかつて次のように疑った。現在の科挙で採用される経義は、「冒原講証結」の文章構成を用いたものであり、これは宋末の経義と同じようなもので、書坊ではまたこのような文章を刊行して定式としようとしている。これは元朝が科挙を設置した当初の見解とは異なるのではなかろうか。
>
> 延祐7年（1320）正月27日、みずからこのことを鄧善之にただしてみた。すると鄧善之は次のように語ってくれた。“前年の会試で落第させた者は、すべて「冒原講証結」を用いたものである。今後はただ子細に朱子「学校貢挙私議」を読み、しっかりとこれを守って法とすることを、わたしは試院の碑文に彫って明言し、受験者を戒めた。科挙を再開した時、私は朝廷にあって科挙再開の議論を聞くことができた。まさに宋代の経義の悪弊を正そうとはかったものであり、それ故に朱子の「貢挙私議」を用いて明経は誰某の説を主とし、兼ねて誰某の説を用い、しっかりと努力をし、伝注を読むように求めるものであった。どうして自ら誤ったりしようか。”(40)

「冒原講証結」とは経義などにおける文章構成のことで、冒頭・原題・講求・証明・結論ときれいにまとめること。程端礼は「作義は格律に拘らず」ということを主張しており、冒原講証結のような形式に束縛された科挙の答案は否定すべきものであった。元朝で再開された科挙も、何度か繰り返すうちにこのような答案スタイルがもてはやされるようになったことに懸念をおぼえ、鄧善之にこのことを質したのである。

鄧善之とは、鄧文原（字は善之、1258 ～ 1328）のこと。彼は科挙が再開された頃は国子司業の任にあった。朱熹の「貢挙私議」を大書して門に掲げさせた話は『元史』本伝にも載っている。至治 3 年（1323）には国子祭酒に就任し、『分年日程』の後序を著す。その鄧文原に対して、科挙が形式主義に陥りそうになっていることの懸念を表明したのである。無論これは形式主義を廃し、本来の読書に努めることを主とするがためである。

要するに、程端礼は科挙再開時に、科挙のための文章作成を課程に導入してはいるが、意識としては科挙のために『分年日程』を作成したわけではない。ところが、学校の教法となることを望んだ程端礼としては、科挙の文章を学ぶ課程も導入した。これ故に、『分年日程』は後に国子監によって郡邑の校官に頒示され、後世では科挙対策の書として注目を集めることになったのであろう。しかし程端礼の主眼は、あくまで読書（経書を読むこと）に努めることによって学識の備わった人格者の養成を目指すことにある。だからこそ、科挙再開時には自からの学問・教授法が科挙の方針と合致していたことを幸いとしたのであり、科挙が形式主義に陥りそうになることに懸念を表したのである。

小結

科挙対策のための学習カリキュラム書として注目される『分年日程』に関して、本稿では程端礼自身の作成意図や問題関心を検討した。程端礼は、若い頃から朱子学を修め、教育にも朱熹の「読書法」を導入した朱子学者である。教育に従事してきた程端礼は、当時の教育問題の一つに学校や教師によって学生の学習が大いに偏ることを指摘する。「偏り」について程端礼は具体的に述べていないが、たとえば教師が『周易』を得意とするなら『周易』だけを丁寧に学生に教え、それ以外の経書は型通りにしか教えないなどということであったろうか。程端礼が経書の正しいと考える解釈を提示せず、また正しい教育法を文章として伝えるという方法も用いずに、学校や書院、あるいは家庭でも利用できる学習カリキュラムとして「読書法」を提示したのは、このような教育の弊害もふまえながら、学生が聖賢の教え（朱熹が提示した聖賢の学）を学べるようにするためであったろう。読書において有益と考える先賢の書を参考として多く挙げるのも、学生自身が正しい読書法に基づいた上で、多様な解釈を参考としながら実感的に経書の意

（聖賢の説いた道理）を把握させようとしたと考え得る。それは読書して学んだことを、過去の経験やいま生きている日々を通して確認・実践し、人としての道理をより確かなものにしていくこととなる。

また、結果的に転機となるのは皇慶の科挙制定である。あるいは『分年日程』が読書（経書を読むこと）だけに主眼を置いた学習カリキュラムを記しただけの書であれば、元明清の士に注目されることは少なかったかもしれない。程端礼は科挙が制定されたことを受けて『分年日程』を執筆したわけでも、科挙の経学重視という理念に従うべく『分年日程』を作成したわけでもない。ただ科挙制定を受けて、学習カリキュラムの最終段階に科挙用の文章学習などを導入するなど、学校の教法として用いられるように企図したと思われる改訂を行なってはいた。結果的にこのような配慮があったからこそ『分年日程』は支持され、科挙対策のための学習カリキュラム書として注目されるようになったのかもしれない。

元朝は朱子学普及の時代と捉えられる。これはこの当時の士人たちが朱熹の教えに従って読書・実践に努めながら、朱子学の正しさを吟味していた時期だったとも言えよう。朱熹の教えに満足できずに陸学を奉ずる士もあれば、陸学が盛んな地域で朱熹の教えに取り組み、その実効性を実感する士も現れている。各地の士人たちが朱熹の教えを実践模索していた時期だからこそ、程端礼のような読書カリキュラムを作成しようとする者も現れることになったのであろう。

注

（1）朱熹の居敬窮理について解説した書は多いが、工夫の方法・目標として多角的に考察した研究として垣内景子『「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』（汲古書院、2005年）を参考として挙げておく。

（2）明代、正統年間には翰林院侍読の周叙が『分年日程』を朝廷に推薦。明人では章懋、蔡元偉、賀士諮等が、清人では陸隴其、張伯行等が『分年日程』を高く評価した。明清時期における『分年日程』に関しては、徐雁平「《読書分年日程》与清代的書院」『南京晓莊学院学報』2006年3期、符永利「略論程端礼的《読書分年日程》」『社会科学論壇』2011年3期を参照されたい。

（3）元朝の教育や学校制度に関しては、牧野修二「元代の儒学教育——教育課程を中心にして——」『東洋史研究』37巻4号（1979年）、申万里『元代教育研究』（武漢大学出版社、2007年）が参考となる。また、三浦秀一「元朝南人における科挙と朱子学」（『中国心学の稜線——元朝の知識人と儒道仏三教——』（研文出版、2003年所収）は、元朝の科挙再開に際し、知識人がどのように対応したかに注目し、程端礼についても併せて論じている。科挙に対する朝廷の意図と知識人の対応を考察した研究として興味深い。

（4）『分年日程』に見える書籍を出版文化の観点から分析整理した研究としては、宮紀子「「対策」の対策——科挙と出版——」（『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会、2006年所収）が示唆に富む。

（5）程端礼および『分年日程』に関する主な研究として次のものが挙げられる。

・侯外廬・邱漢生・張豈之 主編『宋明理学史』第十八章第三節「程端礼《読書分年日程》——理学教育的教学方法和計画」（人民出版社、1984年）

・姜漢椿 校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、1992年）

・施榆生「程端礼《読書分年日程》初探」『漳州師範学院学報（哲学社会科学版）』1998年3期

・張偉、邢舒緒「程端礼及其《読書分年日程》」『寧波大学学報（教育科学版）』26巻6期（2004年）

・張維坤、蔣成瑀「程端礼的読写教学思想——読《程氏家塾読書分年日程》」『浙江教育学院学報』2007年第1期

・寧俊偉「《程氏家塾読書分年日程》与元代的教育思想」『高校理論戦線』2007年6期

・符永利前掲論文

また専論ではないが、牧野修二前掲論文、申万里前掲書も『分年日程』をふまえて論述しており、参考となる。

（6）符永利前掲論文では、「従整体上来説、程端礼的教育思想并没有多少創新」と概括する。

（7）鈴木弘一郎「『程氏家塾読書分年日程』をめぐって」『中国哲学研究』第15号（東京大学中国哲学研究会、2000年）

（8）牧野修二前掲論文には、「撰者程端礼（字敬叔）の序によれば、延祐元年元朝の科挙が朱子学に立脚して創始されたのを機に、目標を科挙のための高度の勉学に置き、経術優先の方針に基づいて編述したものである」とあり、また三浦秀一前掲論文には、「元朝における科挙の理念に沿うべく、程端礼は、朱子書が系統的に学習できるような方法の確立とその普及に心血を注いだ」とある。

（9）『分年日程』の元刊本は四部叢刊続編に、清刊本は叢書集成にも収められている。また四庫全書および昌平叢書にも『分年日程』は収められており、これらは清刊本系となる。

（10）黄溍「将仕佐郎台州路儒学教授致仕程先生墓誌銘」（『金華黄先生文集』巻33、或は『文献集』巻9下所収）

（11）「送朶郎中使還序」（『畏斎集』巻4）。これ以外にも「江浙進士郷会小録序」（同巻3）には「至正十一年」（1351）、「宝林編後序」（同巻3）には「至正戊戌」（1358）、「棗強県学修飾両廡及従祀先賢像記」（同巻5）には「至正十四年」（1354）とも見える。これらが単なる誤写か余人の文章が混ざったものかは不明。

（12）欧陽玄「積斎程君端学墓誌銘」（『新安文献志』巻71所収）

（13）「送教授鄭君景尹赴浮梁任序」（『畏斎集』巻4）に「景尹生与余弟時叔同年、余七年以長」とある。

（14）元朝の学校書院に関しては、林友春『書院教育史』（学芸図書、1989年）、陳谷嘉、鄧洪波 主編『中国書院史資料』上冊（浙江教育出版社、1998年）、鄧洪波『中国書院史』（東方出版中心、2004年）、申万里前掲書などを参照。

（15）程端礼の各任官時期などについては、鈴木弘一郎前掲論文が可能な限りの詳しい考察をしており、参考となる。

(16) 程端礼の自跋と同じ元統3年（1335）に書かれた薛観の跋文にも「敬叔職教江左学校者四十年」とある。これらの記述に従うなら、程端礼の最初の任官は元貞元年（1295）頃のこととなる。

(17)『分年日程』の本文に関しては、拙稿「『程氏家塾読書分年日程』訳注（一）～（七）」『論叢アジアの文化と思想』13号～19号（2004年～2010年）〔2007年の（四）からは中嶋諒氏との共訳〕を参照されたい。

(18) 端礼始者亦嘗用西山応挙工程法教友朋矣。蓋其一日之内、読四書本経、看文作文看史、兼此五項工夫、而其用工迫促、所読之書、不精不熟、無一種可了、而所作之文、亦不能工。与今俗学無異。且使学者終身無為己自得之実。所謂本末俱失者也。其後直用朱子法、為此分年日程、確守以与友朋共学、極有実効。然亦約自十五志学起、不過三年読四書本経伝注、并考索。三年之外、看史学文編鈔、共六年耳。所謂本末俱得者也。(『分年日程』巻2（頭注))

(19) 惜乎、賓興有制、而学校法未立、故其所教所学、不過随其学官之所知所能、故猶不免於前日之渉猟剽窃、而無沈潜自得之実、所試経義、固守反復虚演之旧格、而試官不能推本設科之深意、以救末流之弊。……庶乎学校有造士之実、有以上裨賓興之制、志道之士、無択乎学院、而皆可以為歳修游息之所矣。余既為書其興修之歳月、因叙古今学校之得失、乃以朱子読書之法為学者勤。(『畏斎集』巻5「弋陽県新修藍山書院記」)

これは至元6年（1340）程端礼70歳の頃に執筆されたものとなる。

(20) 第因方今学校教法未立、不過随其師之所知所能、以之為教為学。(『分年日程』巻2)

(21)「送王伯華帰永嘉序」(『畏斎集』巻4）は、一時預かっていた李季和の弟子（王伯華）が帰郷する際に著わしたものである。ここでは二人の師に就いて学ぶ難しさを前提として、学術では李季和より劣る自分であるが、彼も私も同じように「朱子読書法」に基づいて学んできたこと、それを学生にも伝えていることを述べている。これも学習方法としての「朱子読書法」への信頼の表れであり、どの師に就こうとも学び方が正しければ実効は得られることを確信していたのであろう。

(22)『四庫全書総目提要』巻93・朱子読書法によれば、元の時にはすでに『朱子読書法』の版は存在せず、至順年間に趙之維が集慶路学にて重鏤したという。そして『分年日程』綱領に引く「朱子読書法」には「近已刊集慶学」との小字注があり、この注記を元統三年（1335）までのことと想定すれば、まさに至順年間（1330～1332）に集慶路学で刊行された現行本『朱子読書法』を指す可能性が極めて高い。

(23)『朱子読書法』巻1に「大抵観書、先須熟読使其言皆若出於吾之口、継以精思使其意皆若出於吾之心、然後可以有得爾。至於文義有疑、衆説紛錯、則亦虚心静慮勿遽取捨於其間」、「横渠云、書須成誦。精神都是夜中或静坐得之」、同巻2に「読書閑暇、且静坐、教他心平気定、見得道理漸次分明」、「読書閑暇、宜於静室安坐。庶幾心平気和、可以思索義理」とある。

(24)『分年日程』巻1に、「灯火、起中秋止端午」、「夏夜浴後露坐、無灯、自可倍読」とあり、また同巻1に「大抵小児終日読誦、不惟困其精神、且致其習為悠緩以待日莫、法当纔弁遍数、即暫歇少時、復令入学」とある。

(25)『分年日程』巻３・旁証には「朱子調息箴」とそれに関する饒魯の語録などを収め、静坐の有効性も傍証として収めてはいる。

(26)『分年日程』綱領「先師果斎史先生、毎教学者、必首以此篇使之掲于座右曰、学問進修之大端、其略有四。一曰尚志、二曰居敬、三曰窮理、四曰反身。大抵爲士莫先於尚志。」

(27)『元史』巻190・程端礼伝「慶元自宋季皆尊尚陸九淵氏之学、而朱熹氏学不行於慶元。端礼独従史蒙卿游、以伝朱氏明体達用之指、学者及門甚衆。」

(28) 趙偕『宝雲堂集』(『宋元学案』巻93所引)「凡日夜云為、若恐迷復、則于夙興入夜之時、宜静坐以凝神。」また『宋元学案』巻93には「葉心、字伯奇、慈渓人。宝峰教以静坐。」とあり、趙偕（宝峰）が教えとして静坐を伝えていることも見える。

(29)「元代心学教育思想」(孫培青、李国鈞 主編『中国教育思想史』第２巻、華東師範大学出版社、1995年所収）では、主要な教育原則として「立己」「静」などを挙げている。「静」も朱陸の重要な争点となるであろう。また元朝における朱陸学者の分布を概観し、南宋末より朱子学を奉ずる士が徐々に増えていくなか、朱子学者のなかからも陸学に傾倒する人々が現れてくることを具体的に指摘した研究として、馬淵昌也「元・明初性理学の一側面――朱子学の瀰漫と孫作の思想」『中国哲学研究』４号（1992年）があり、とても興味深い。程端礼に限らず、論争相手（陸学者）の主張の要点を警戒し、それが自身の主張や強調点にも影響を与えてくることは多いであろう。

(30) 牧野氏前掲論文、三浦氏前掲論文。注（８）参照。

(31) 元朝の科挙については、代表的な研究として安部健夫「元代知識人と科挙」(『元代史の研究』創文社、1972年所収）が挙げられる。また、近年の研究動向については、渡辺健哉「近年の元代科挙研究について」『集刊東洋学』96号（2006年）参照。

(32) 顧歆芸「論科挙・四書・八股文的相互制動作用」『北京大学中国古文献研究中心集刊』３輯（2002年）参照。

(33) 国朝自許文正公以朱子学光輔世祖皇帝、肇開文運百年之間、天下学者皆知尊朱子所注之経、以上遡孔孟、其功大矣。貢挙之制、又用朱子私議、明経主程朱説、……一洗宋末反覆虚演文妖経賊之弊、俾経術理学挙業合一、以便志道之士、豈漢唐宋科目所能睨。其万一士之学於今日者、豈非幸与。(『畏斎集』巻５「弋陽県新修藍山書院記」)

(34) 程端礼は鄧文原などから聞き及びながら、皇慶の科挙再開に尽力した人物としては韓居仁に重きを置く。『分年日程』巻２（頭注）に「韓礼部、名居仁、字君美、号艾渓、汴人。早与果斎史先生同師常徳陽先生。至元間、来為慶元路経歴。極力興学校、敦請果斎為大学師、相与定議、諸生明経、必主某説兼用某説、蓋用朱子貢挙私議法也。其後入為礼部、掌行科挙。鄧善之云、科挙之行、集議折衷奏裁韓君美備殫心力。事成而公卒、殆非偶然。」と記す。

(35)『分年日程』巻１の「空眼簿」の解説は、他のところと内容に多少の重複が見られる。それらを比較すると他所の方が敷衍発展した解説となっており、おそらく「空眼簿」の解説は初期に書かれた文章であろう。

(36) 庶日有常守、心力整暇、積日而月、積月而歳、師生両尽、皆可自見。施之学校公教、尤便有司拘鈐考察。(『分年日程』巻１)

(37) 改元延祐、而設科取士之制行、喜余之所教明経作義之法大略相同。(『畏斎集』巻４「送

馮彦思序」)

(38)『分年日程』自序に「今制取士、以徳行為首、経術為先、詞章次之、蓋因之也。況今明経一主朱子説、使理学与挙業畢貫于一、以便志道之士。漢唐宋科目所未有也、誠千載学者之大幸。」とある。

(39)『分年日程』巻1に「人若依法読得十余箇簿、則為大儒也、孰御」とある。「簿」とは「空眼簿」のことで、"読書して空眼簿を十回以上終えたなら、誰が大儒となることを妨げようか"の意。

(40) 端礼嘗疑方今取中経義、格用冒原講証結、似宋末第二篇義様、書坊又刊以為定式。恐非設科初意。延祐七年正月廿七日、親以質之鄧善之。善之曰、前年会試所落者、皆冒原講証結者。今後只宜子細看朱子貢挙私議、守之為法、某已於試院碑上明言、以戒挙子矣。設科時、某在朝、与聞貢挙之議、正欲革宋経義敷衍虚浮之弊、所以用貢挙私議、明経主某説、兼用某説、要人実下工夫読伝注、豈宜自誤。(『分年日程』巻2(頭注))

※本稿で用いる「学習カリキュラム」とは、程端礼が『分年日程』で示した教育課程および教師・教官としての留意点、学習者としての学習法のことを便宜上表現したものである。

〔附記〕本稿は学習院大学東洋文化研究所グローバル東アジア学40による研究成果の一部である。